

There 構文の捉え方

湯本 久美子

yumoto@ccs.aoyama.ac.jp

キーワード: *There* 構文 定性 直示性 話し手の二面性 参照点構造

要旨

本論は、所格 “there”・直示的 *there* 構文・存在的 *there* 構文そして提示的 *there* 構文を分析対象とし、*there* 構文における事態の捉え方を明らかにすることを目的とする。その方法として、最初に、最も具象的用法と考えられる所格 “there”の基本的性質 —①定性＝場所指示・非制限領域、②直示性＝直示の中心としての話し手・指示物への遠さ・聞き手の存在の含意、③観察対象と観察主体の二面性を持つ話し手— を導き出す。そして、これらの性質と各種の *there* 構文の特徴との関連を分析する。その分析結果から、所格 “there”と各種の *there* 構文は家族的類似性を持つ連続体を成していること、そして *there* 構文の捉え方とは、*there* 構文の最も際立ちのある文頭におかれている “there” を介しての事態の解釈であることを提案する。本論の考え方は、*there* 構文の “there”が一種の抽象的場面設定機能を持っているとする Langacker (1991:352/2000:43/2011:213)の提言、そして語彙と文法は連続体であるという認知文法の主張(Langacker 2000/2005/2008)に沿うものである。

1. はじめに

(1)は *there* 構文と呼ばれており、この構文の議論点の一つは、(2)と異なり不定の実体の導入を好むという情報構造にある。そしてもう一つの議論点が “there”自体の意味を巡るものである。本論の目的はこの後者に焦点を当て、*there* 構文における “there”の拡張プロセスを示し、*there* 構文の事態の捉え方を明らかにすることである。

(1) There is a lake in that valley.

(2) ?A lake is in that valley.

本論は Langacker が提唱している認知文法を理論的枠組みとするものであるが、*there* 構文は認知文法においても“First, I have not considered ‘existential’ *there* and how it relates to impersonal *it*.” (Langacker 2011:213) と述べられているように、研究課題の一つとなっている。尚、*there* 構文と impersonal *it* 文(3)との関係については、本論での分析結果を踏まえての次の研究課題としたい。

(3) It is {possible / conceivable / plausible / feasible / imaginable} that they could be of some use to us.

分析方法として、第 1 に、“there”の語彙的用法と考えられる所格 “there” (4)の基本的性質—①・②・③—を導き出す。

- ① 定性： 場所指示・非制限領域
- ② 直示性：直示の中心としての話し手・指示物への遠さ・聞き手の存在の含意
- ③ 話し手：観察対象・観察主体の二面性

- (4) 所格 “there” : Don’t leave your shoes there.
- (5) 直示的 there 構文 : There’s Harry with his red hat on. レイコフ(1993:580)
- (6) 存在的 there 構文 : There was a man shot last night. ibid.
- (7) 提示的 there 構文 : After they had travelled for many weeks, there came a moonlit night when the air was still and cool. Huddleston & Pullum (eds.) (2002:1402)

第 2 に、文法的性質の高い there 構文(5-7)における上述の①・②・③の拡張の仕方を観察する。この手法は語彙と文法は連続体であるという認知文法の考え(Langacker 2000/2005/2008)に沿うものである。この考察の中で「観察者」(高見・久野 2002:57)と言われている話し手の姿をより詳細に検討する。

分析の結果、there 構文の事態の捉え方として④を提案する。そして所格 “there”(4)そして各種の there 構文(5-7)は家族的類似性を持つ連続体を成していると考えられることを述べ、上述の所格 “there”の①・②・③の特徴は④a～④c の現象へと拡張していることを説明する。

- ④ There 構文の捉え方とは、there 構文の最も際立ちのある文頭におかれている “there” を介しての事態の解釈である。
 - a. 所格 “there”・直示的 there 構文では “there” は位置関係を示している。所格 “there” においては、話し手の存在場所が参照点であり “there” が指示する場所がターゲットであるが、直示的 there 構文では参照点は同じであるが、ターゲットは場所に存在する実体へと変わっている。存在的・提示的 there 構文においては、“there” は次第に探索領域・参照点へと変化し、ターゲットは其中へ導入された実体である。存在的 there 構文における参照点は静的な具象的・抽象的場面の枠組みとして機能し、提示的 there 構文においてはその枠組みは動的な場面展開の働きを持つ。
 - b. 所格“there”の指示物への遠さという性質が there 構文においては新情報・抽象化された実体の導入を支えている。
 - c. 話し手は there 構文においては観察対象としての姿は薄くなり、冷静な観察主体として枠組み内の局面的事態を「ある的」に表現している。さらに聞き手の知識の状態に

留意しつつ積極的に事態を解説する能動的な働きを見せている。

本論の構成は次の通りである。2 節では分析の出発点となる “there” を巡る諸議論を紹介し、本論の分析の方向性を述べる。3 節では所格 “there” の特徴(3.1)を分析の角度として、直示的 there 構文(3.2)、存在的 there 構文(3.3)、提示的 there 構文(3.4)の各々の特徴を考察する。4 節では、3 節での分析結果を踏まえ、there 構文における “there” の拡張プロセスと事態の捉え方について考察する。5 節は結論を述べる。

2. “There” の議論を巡って

本節では、“there” について形式的なダミー主語や虚辞と見なす立場と、意味があるものと捉える二つの考え方があり、本論の立場は後者に基づくことを述べる。

There 構文についてよく知られている特徴の一つは、不定の存在の導入である。文頭に既知実体を好む英語¹においては、(2) “?A lake is in that valley.” のように不定実体を主語に持つ文の容認度は低い。そこから、文頭に不定実体を置くことを回避するための様々な情報構文があると言われている。例えば、Huddleston & Pullum (eds.) (2002:1366) は、全部で 9 の “information packaging constructions”² を挙げている。その中の多くは語順を変えることにより既知情報を文頭に置くという手法であるが、there 構文(1) “There is a lake in that valley.” は “there” を文頭に加えることにより不定実体の導入を可能にするという特徴的な形式を持っている³。

この特徴的な “there” について、Huddleston & Pullum (eds.) (2002:1391) は “*There_{pro} functions only as subject or raised object, and can fill the subject position in interrogative tags: There is something wrong, isn't there? It is comparable to certain uses of the pronoun it, which can also serve as a dummy*

¹ Huddleston & Pullum (eds.) (2002:1372): Some general tendencies regarding information structure (日本語訳は筆者による)

- (i) 重い要素 (要素の重さはその長さ及び統語的・形態的複雑さによる) は節の最後の方に置かれる。
- (ii) Focus (典型的には new information) は典型的に節の後方に置かれる。
- (iii) 主語は addressee-old (聞き手にとり既知情報) である可能性がある。
- (iv) Familiar information (話し手が話し手と聞き手が共有していると考えうる情報) は new information の前に置かれる。
- (v) Information-packaging constructions はそれらが適切に使われるコンテキストを要求する傾向がある。

² Huddleston & Pullum (eds.) (2002:1366):

	Information Packaging Constructions	(標準構文) □の付記は筆者による
(i) Preposing	This one she accepted.	(She accepted this one.)
(ii) Postposing	I made without delay all the changes you wanted. (I made all the changes you wanted without delay.)	
(iii) Inversion	On board were two nurses.	(Two nurses were on board.)
(iv) Existential	There is a frog in the pool.	(A frog is in the pool.)
(v) Extraposition	It is clear that he's guilty.	(That he's guilty is clear.)
(vi) Left dislocation	That money I gave her, it must have disappeared. (That money I gave her must have disappeared.)	
(vii) Right dislocation	They're still here, the people from next door.	(The people from next door are still here.)
(viii) Cleft	It was you who broke it.	(You broke it.)
(ix) Passive	The car was taken by Kim.	(Kim took the car.)

³ Quirk et al (1985:1402) は “A car is blocking my way.” は文頭に置かれている実体が新しいもので以前に導入されている事柄と関連がないことから、ある種のぎこちなさがあり、このような状況において “some kind of dummy theme” を用いることが便利であるとして “There is a car blocking my way.” を示している。

subject (e.g. in the extraposition construction *It's a pity we missed them.*)と、説明している。“There”は、元々は自動詞的前置詞である“locative there”の場所の意味が希薄になり、代名詞として再分析されたものであるとし、“dummy there”と呼んでいる。虚辞と見なすこの扱いは、いわゆる外置構文と呼ばれている構文(3) “It is possible that they could be of some use to us.”における“it”と同様である。

さらに、there 構文である(8)とそうではない(9)との違いについては、“there”と “be”を持つ前者は “the existential construction”であり、その機能は存在に関する命題を表現すると述べているにとどまっており、there 構文の事態の捉え方についての言及などはない。

- (8) There were several windows open. Huddleston & Pullum (eds.) (2002:1391)
 (9) Several windows were open. ibid.

一方、本論が理論的枠組みとする認知文法においては、このような“it”そして “there”をダミー主語であるとは考えない。なぜならば、文法的な知識の単位は意味と形のペアのシンボルであり、そこから語彙と文法は連続体であると考えているからである (Langacker 2008:5)。

前述の「いわゆる」外置構文についても、認知文法においては捉え方が全く異なる。Langacker (2008:390) は、“it”はその後に続く概念内容のベースとなる “scope of awareness” (意識のスコープ) を表していると述べている。さらに、Langacker (2011:179) では、“it”の “expletive” / “pleonastic” / “epenthetic” / “dummy”などの呼称はその特徴を十分に表していないと反対し、“impersonal *it*”と名付けている。そして Langacker (2011:207) においては、“impersonal *it*”は概念化者の意識のスコープを表すこと、その概念化者は非人称構文においては一般化された概念化者である傾向があると述べている。

本論で分析対象とする “there”については、Langacker (1991:352-353) / (2000:43) は Lakoff^{4,5}

⁴ レイコフ(1993:671-673): ボリンジャーは存在の “there”は意味をもって、「何かを意識に持ち込む」 (“bring something into awareness”)機能を果たす、と主張している。ボリンジャー(1977, pp.93-94)は「何かを文字通りあるいは比喩的にわれわれの面前に持ち出す」空間的場所格を「何かをわれわれの心に提示する」存在の there と対比している。ボリンジャーの示唆するところでは、there は「意識の中へ持ち込む」の「意識」を提示し、意識は「抽象的な場所」である。ボリンジャーは、われわれと同じく、直示の場所格は現前—空間、われわれの知覚、談話、生き生きした想像、などの中での現前—に関わる、と述べている。…… われわれが行うことになる提案はボリンジャーの示唆したことと主旨が非常に近い。われわれは漠然とした「意識」という用語に代えて、フォコニエ(Fauconnier 1985)で提案されたメンタル・スペース(mental space)という概念を用いる。メンタル・スペースとは、その中に思考が生じたり、概念的なものが位置づけられたりする媒体のことである。…… 存在の there はその中に概念的な実体が位置づけられるメンタル・スペースを提示する、という考え方を提案する。…… 存在直示構文は次のメタファーに基づいている。存在は概念空間内の場所として理解される。

⁵ 高見・久野(2002:50): 生成文法では、there 構文の there は、意味内容を持たず、拡大投射原理を形式上満たすために主語位置に置かれる、「虚辞」であると考えられている。しかし Kuno(1972)では、there 構文の there は意味を伴わない虚辞ではなく、後置された場所を表す副詞句の「代副詞」として分析されている。つまり、there は具体的な場所句を導入する要素として分析されている。また Bolinger (1977:91)は、there 構文の there が、場所を表す副詞の there の拡張であり、「一般化された場所」(generalized location)を表すと主張し、Langacker (1991:352)は、「抽象的場所」(abstract setting)(または特定化されない場所(unspecified setting))を表すと主張している。このような考えは、there 構文が、これまで考察した多くの例で場所を表す句を伴っているという事実から正しいと思われる。

そして Bolinger を受けて、一種の抽象的場面設定 (abstract setting) であり、提示的機能を持っていると分析している。そして “there” と “impersonal *it*” との関係については、“impersonal *it*” の方がより抽象的で包括的という提言は行いつつも、今後の課題としている⁶。

⁷Still, he(=Bolinger) is certainly correct that a *there*-clause brings an element into awareness and thus serves a presentational function. Langacker (1991: 353)

I would also analyze the “dummy” or “existential” *there* as a kind of abstract setting.

(21) a. *There was an eagle on the roof.*

b. **An eagle was been on the roof by there.*

These sentences do not profile participant interactions. Because they first evoke the global setting, and then zoom in to focus on a specific element, they are better described as having a “framing” or “presentative” function. Langacker (2000:43)

First, I have not considered “existential” *there* and how it relates to impersonal *it*. In other languages, the distinction made in English is neutralized, e.g., French *il* translates as *there* in (40a). At present I can offer only the vague suggestion that *it* tends to be more abstract and more inclusive than *there*.

(40a) *Il existe des pneus qu'on a pas besoin de gonfler.* p.208

‘There exist tires that don’t need inflating.’

Langacker (2011:213)

本論では、この Langacker の問題提起そして示唆に基づき、所格 “there” と there 構文の関係、そして there 構文の捉え方について考察を行う。

3. There 構文の連続体

本節では、語彙的性質を持つ 所格 “there” の基本的性質(3.1)からより抽象度が高く文法的性質の強い there 構文 —直示的 there 構文(3.2)・存在的 there 構文(3.3)・提示的 there 構文(3.4)— の特徴を見ていく。

3.1. 所格 “there”

本節では所格 “there”(4) (“locative *there*”-Huddleston & Pullum eds.2002:1391) の基本的性質を分析し、その結果として①定性・②直示性・③話し手の3点を提示する。

(4) 所格 “there”: Don’t leave your shoes there.

⁶ Langacker (1991: 8.1.3.4 pp.351-355) は “Abstract settings” というタイトルで フランス語と英語の “setting-subject constructions” について議論している。There 構文について、“Suddenly there was a loud commotion.”を “*Suddenly a loud commotion was.”とすることができないことから、there 構文は “there-less” 構造から “There-Insertion” 規則によってできたものではないことを説明している(p.352)。そしてその機能について “*There* designates an abstract setting construed as hosting some relationship.”と述べている(p.352)。

⁷ Langacker (1991: 353) のこの意見は、*there* はダミー主語ではなく、“abstract setting”と主張したのは Lakoff 及び Bolinger が先達であるとしたうえで、Bolinger の意見の全てを認めているのではないが、と述べた上での主張。

第1の性質は「定性」である。そして「何を定めているか」については制限がある。(4)の“there”が指示できるのは場所のみであり、例えば(10)の“there”を“on the table”と置き換えることはできるが、(10)において“on January 7”のような時を指示するという意味にはならない。しかし、場所であれば、(11)が示すようにどの大きさでも“there”は指示することができ、その領域は制限されていない。つまり“there”は「定」で「場所」かつ「非制限領域」を指示している。

(10) Don't leave your shoes there. = on the table (*on January 7)

(11) I really had a wonderful time there. = at my friends' party, in Hawaii, in the U.S.A. etc.

第2の性質は「直示性」である。この直示性には複数の局面が見られる。その第1の局面は“there”が必然的に直示の中心を持っていることである。言い換えると“there”は誰かの視点から見た“there”であるということになり、“there”ということばのみで、直示の中心が存在していることを意味している。多くの場合、視点は話し手に置かれることから(Kuno & Kaburaki 1977)、デフォルトにおいては(4)“Don't leave your shoes there.”の“there”の直示の中心は話し手という解釈が妥当であり、話し手から見た「あそこ」が“there”ということになる。この構図を参照点構造で言い換えると、参照点が話し手、ターゲットは“there”が指示する場所となる⁸。

そしてその話し手と向き合う「聞き手」の存在の含意が直示の第2の局面である。直示表現がスピーチイベントと密接な関係にあることから聞き手の存在を考えるのは妥当なことであるとする。そして、直示の第3の局面は距離に関するものである。“There”は話し手にとりその場所が「遠い」ことを示し、それは“here”との対比を想起させている。

第3の性質は「話し手」である。上述した直示性から直示の中心としての話し手が存在しているのがわかる。しかし、この話し手はどこにいるのだろうか、「舞台の上」にいる観察対象な

⁸ Talmy (2017:5) はジェスチャーを伴い用いることができる下記の例文を取り上げている。

- You can put your glass down right !-there. Talmy (2017:5/277)
(話し手は自身の側に立っている客に向かってこの発話を行い、向かいのテーブルの角に向けて指さしをしている。“!”はそのことばに強いストレスが置かれていることを示している。)

この例文について Talmy (2017:5) は“The trigger *there* in the speaker's utterance not only alerts the hearer to find a particular target, but it also provides the core cues that this target is distal and is a location, not an entity.”と述べている。さらに、Talmy (2017:5-6) は“However, this cue by itself is not enough, given the multitude of distal locations in the situation. But the speaker's gesture also provides a gestural cue to the target. By our analysis....., this gesture leads the hearer to imagine an intangible line extending from the speaker's finger to the table's corner, where the target should be.”とも述べており、非常に興味深い。

つまりジェスチャーを伴う“there”はターゲットが「遠」でかつ場所であることは指示するが、それは明確さを持つ指示ではなく、単に話し手の指先からターゲットの場所までのどこかを指しているに過ぎず、その領域特定は聞き手の想像に任されている。この特徴も所格“there”の制限されない定指示領域の性質と重なる。

加えて、この領域内の不特定という“there”の性質は、Langacker (2006:31) が前置詞句について述べている性質 - 探索領域内のどの箇所であるかと特定しない (The main point is that a preposition does not say in very specific terms just where its trajector must be vis-à-vis the landmark – it can be anywhere within an extended region.) – と重なる (2018 年度東京言語研究所「認知言語学」西村義樹先生の講義にてのご教示)。尚、前置詞句と“there”との関係については4節にて改めて議論する。

のだろうか、それとも「舞台の外」にいる観察主体なのだろうか。なぜならば、(4)“Don't leave your shoes there.”において、話し手が存在していることは“there”の直示性からのみわかることであり、話し手は言語的には明示されていないからである。まず、この「舞台」⁹と話し手の関係から説明する。

舞台を見ている観客が舞台観察に熱中して自己意識を持たないことがあるように、視覚対象物である“onstage”にある客体—観察対象 (conceptualized) を知覚している視覚者/(viewer/conceptualizer)は、自身の存在を概念化の客体として捉えていない。このような場合のviewer/conceptualizer は概念化の主体としての働きしかなく「主體的」な存在であり、viewer/conceptualizer は主體的に解釈される。一方、舞台上の上の実体は概念化の客体物として「客体的」な存在であり (観察対象)、客体的に解釈される。

下記の図1の(a)がこの構図を表している。“V”は“viewer”、“P”は“perceived object”、“PF”は“perceptual relation”、“OS”は“on stage”の略である。図1(a)における“V”(viewer/conceptualizer)は舞台上の客体を見ている主體的存在—観察主体である。

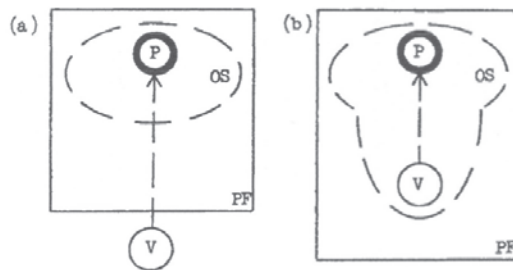


図1 Langacker (1990a:7 Figure 1 (a) (b))

一方、図1 (b)は“egocentric viewing arrangement” (Langacker 1990a:8) の構図を示すものであり、そこでは viewer/conceptualizer も舞台上に登場していることから観客自身も視覚に入っており、概念化の対象—観察対象となっている。

この2タイプの違いを言語的に表しているのが、(12)と(13)である。

⁹ Langacker (1996:334-336) は, Fauconnier が “mental space” と呼ぶものの一つを “the current discourse space”(CDS) と呼んでいる。このスペースは話し手と聞き手が共有している要素との関係で構成されており、話し手の知識を意味する“K_S”と聞き手の知識を意味する“K_H”のスペースが交差している部分を指している。この話し手の知識“K_S”の中には“maximal scope”(MS)と呼ばれる部分があり、これはCDSそしてK_Hの一部とも重なっている部分である。MSは言語表現が喚起するまたは前提とする意味のベースとして機能するものである。さらにMSの中には“immediate scope”(IS)という特別の部分があり、この部分が言語表現の直接的意味として機能する。

このISはメタファー的に“onstage region”と呼ばれてもおり、観劇に例えると舞台に相当し、注意が向けられる場所である。一方、MSは劇場全体である。そして観客席に相当する部分が“offstage region”ということになる。この観客席 (offstage) から舞台 (onstage) を見る視点構図が“subjective”(「主體的」)そして“objective”(「客体的」)の非対照性の概念的原型である(Langacker 1990b:15)。

- (12) Vanessa was sitting across the table. Langacker (1990a:20)
 (13) Vanessa was sitting across the table from me. ibid. 下線は筆者による

(12) のデフォルト解釈ではその参照点は話し手であるが、その参照点は言語化されておらず、Langacker(1990a:20) は“(4)b (=本論の 12 を指す) comes closer to describing the scene as the speaker actually sees it”と述べている。これは上図 1(a)が表す話し手と事態との関係である。一方、(13) は図 1(b)が示す “egocentric viewing arrangement” (自己中心的配置) を言語的に示した例文である。ここでは参照点である話し手が言語化されることによって舞台の上に登場しており、Langacker (1990a:20) は“(4)a (=本論の 13 を指す) suggests a detached outlook in which the speaker treats his own participation as being on a par with anybody else’s”と説明している。そこでは話し手はもはや単純に観察主体ではなく、ある程度観察対象となっているのである。

これらの構図を言い換えると、話し手が言語化されていない(12)は話し手の「主体度」が高く (観察主体)、“me”という人称代名詞で言語化されている(13)は話し手の「客体度」が高い (観察対象)ということになる。このコントラストは話し手が事態をどのように捉えているか、さらに、事態における自身の位置づけをどのように捉えているかの違いを示している。

とするならば、(4) “Don’t leave your shoes there.”において話し手の位置づけはどうかであろうか。“there”に話し手が存在していることはその直示性からのみわかることであり、話し手は言語的には明示されていない。Langacker (1985:109)¹⁰はダイクシス表現のスピーチアクト参与者について、“they are responsible for observing (i.e. conceptualizing) the scene (as with any expression); but they also functions as elements of the scene in question.”と、参与者は観察主体と当該のシーンの登場者、観察対象の2つの異なった方法で関与していると説明している。従って、ダイクシス表現である“there”の話し手は観察主体でもあり、かつ観察対象でもあるという二面性を持っていることになる。

これらの考察から所格 “there”は下記の特徴をもっていると考えられる。

- ① 定性： 場所指示・非制限領域
- ② 直示性： 直示の中心としての話し手・指示物への遠さ・聞き手の存在の含意
- ③ 話し手： 観察対象・観察主体の二面性

また、参照点構造から見ると、話し手が存在する場所が参照点であり、ターゲットが “there”で指示される場所となる。

表 1

	定性	直示性	話し手
所格 “there” (4)Don’t leave your shoes there.	there=場所指示・非制限領域 -参照点=話し手 -ターゲット=there の指示する場所	直示の中心=話し手 指示物=遠 聞き手=存在の含意	観察対象・観察主体

¹⁰ Langacker (1985), Langacker (2000), Langacker (2006)は西村義樹先生による東京言語研究所 2018 年度「認知言語学」にてご教授いただいた論文であり、西村先生のご指導に心より感謝申し上げます。

3.2. 直示的 there 構文

本節では、レイコフ(1993:事例研究 3 There 構文)が直示的 (deictic)^{11/12}と呼ぶ there 構文(5)について、①“there”の働き、②参照点構造、③ジェスチャー、④聞き手の 4 点からレイコフの知見を中心に観察していく。

- (5) 直示的 there 構文: There's Harry with his red hat on. レイコフ(1993:580)
 (4) 所格 there: Don't leave your shoes there.
 (6) 存在的 there 構文: There was a man shot last night. レイコフ(1993:580)

まず、一見したところ、(5)直示的 there 構文は文頭に“there”を持つことから、形態的には所格“there”(4)にというより、(6)存在的 there 構文に相似している。この類似は、直示的 there 構文(5)は、所格“there”(4)と存在的 there 構文(6)のいずれに近い性質を持っているかという疑問をもたらす。

この疑問について、レイコフは、直示的 there 構文は存在的 there 構文とは異なる^{と主張している}と主張している。その根拠は“there”の働きの違い——主語か場所副詞か——である。主語性を確かめる方法として、例えば、付加疑問文において、“He is a good boy, isn't he.”の様に、主文の主語“He”は付加疑問文の主語“he”と一致する、ということが挙げられる。この点において、直示的 there 構文(14)は非文である。他の主語性テスト結果(15-18)からも直示的 there 構文の“there”は主語とは見なされず、そこから場所副詞であるということになる。一方、存在的 there 構文では、付加疑問文・繰り上げ構文・否定可能性・埋め込み可能性のいずれの場合にも非文にはならず“there”の主語性が確かめられ、逆に“here”との交代は不可となる、従って、主語であると説明している。

- (14) 付加疑問文: *There's Harry with his red hat on, isn't there? レイコフ(1993:580)
 (15) 繰り上げ構文: *There is believed to be Harry with his red hat on. レイコフ(1993:581)
 *There is likely to be Harry with his red hat on. *ibid.*
 (16) 否定可能性: *There isn't Harry with his red hat on. *ibid.*
 (17) 埋め込み可能性: *If there's Harry in the room with his red hat on, I'll be surprised.
 *I doubt that there's Harry in the kitchen. レイコフ(1993:582)
 (18) Here との交替: 可 There's Harry with our pizza! Here's Harry with our pizza. *ibid.*

¹¹ レイコフ(1993:627)による直示的 there 構文の統語的・語彙的条件

Here または there が文頭 ・ 単純現在時制 ・ 名詞句が定代名詞ではない限り動詞が先行 ・ 文末句は任意的 (Harry is carrying a huge herring. There's Harry, carrying a huge herring.) ・ 名詞句が主語 ・ 名詞句は補文ではない ・ 語彙=Here または there ・ be/移動動詞/位置動詞

¹² レイコフ(1993:598-599): 直示的 there 構文はプロトタイプカテゴリーを成しており、最もプロトタイプである中心的直示構文(There's Harry with the red jacket on.)の他に、知覚的・談話・存在・活動の開始・配達・模範・憤慨・物語の焦点・新しい企て・提示的のカテゴリーがある。

これらのことから、直示的 *there* 構文の “*there*” はむしろ所格 “*there*” の場所副詞としての特徴を色濃く受け継いでいると考えられる。

それでは、この場所副詞として機能する直示的 *there* 構文の “*there*” の参照点構造はどのような構図なのだろうか。

レイコフ(1993:580)は、「*There's Harry with his red hat on* では *there* という語が話者から見たある場所を選び出すのに用いられている。」と述べている。加えて、「この文の *there* は、場所を選びだしているので、場所副詞であり、また、選び出す場所が話者から見てのものであるから、直示的である。」と言っている。そこから、所格 “*there*” と直示的 *there* 構文の “*there*” は同じ参照点構造を持っているように、一見、見受けられる。

確かに、直示的 *there* 構文の話し手は舞台上にいることから、話し手は観察対象でもありかつ観察主体でもあることになり、この点は所格 “*there*” と同じである。この話し手が所格 “*there*” においても直示的 *there* 構文(5) “*There's Harry with his red hat on.*” においても参照点であり、やはりこの点も同じである。しかし、ターゲットには微妙な違いがある。所格 “*there*” においては、ターゲットはあくまでも場所であるが、直示的 *there* 構文のターゲットはその場所にいる実体、赤い帽子をかぶったハリーである。

さらに、コミュニケーション機能の違いもある。レイコフ(1993:585)は、所格 “*there*”(19)と直示的 *there* 構文(20)は等価ではなく、(20)では話し手は聞き手の注意を “*here*” で指定される場所へ向けることを行っていると説明している。伊藤(2005:92)も「この構文における *there* は、話し手と聞き手との相対的な場所 (location) を取り立てる役割を担っている。」と説明しており、聞き手の存在に意味がある。

- | | |
|--|----------------|
| (19) <i>Harry comes here.</i> | レイコフ(1993:585) |
| (20) <i>Here comes Harry.</i> | ibid. |
| (21) <i>There goes Harry!</i> (ほら、ハリーが行くよ) | レイコフ(1993:587) |

従って、聞き手の存在は直示的 *there* 構文においては含意ではなく前提であり、話し手は聞き手に向かって強勢¹³が置かれた *there* が指示する場所に注意を促すという能動的な立場にあることになる。この能動的な立場について、レイコフ(1993:587)は(21)を例に挙げて、「聞き手の注意をそこにある何かに向ける」ことを発話内の力 (illocutionary force) と結びつけている。

さらに、「直示の *there* には指し示すジェスチャーが伴うこともある」とレイコフは述べており、ジェスチャーが可能ということはその指示領域はかなり狭く制限されているということになる。上述の聞き手への注意喚起という機能を考えると、やはり典型的にはジェスチャーが可

¹³ 伊藤(2005:92-93)は直示的 *there* 構文と存在的 *there* 構文の focus を示す強勢の違いを示している。そして直示的 *there* 構文は一種の topic-comment 構文と考えるのが妥当と述べている。

1) 直示的 : *THERE's a new Peugeot across the street.* (大文字=強勢) 伊藤(2005:92)
 2) 存在的 : *There's a new PEUGEOT across the street.* (大文字=強勢) ibid.

能という意味での制限領域における用法が典型的なのであろう。一方、所格 “there” は非制限領域の指示としても用いられる場合があり(11)、その場合にはジェスチャーを使用することはできない。

(11) 所格 “there” I really had a wonderful time there. = at my friends’ party, in Hawaii, in the U.S.A. etc.

上述の観察から、直示的 there 構文は所格 “there” と同様に話し手を参照点としている等、類似点はあるが、ターゲットはその場所にいる実体へと変化していること、直示的 there 構文が指示している場所の領域が典型的にはジェスチャーが使える領域に制限されていること、そしてその存在が前提とされている聞き手の注意を引く点に焦点が当たっていることが異なる。

表 2 特徴点

	定性	直示性	話し手
所格 “there” (4) Don’t leave your shoes there.	there=場所指示・非制限領域 -参照点=話し手の場所 -ターゲット=there の指示する場所	直示の中心=話し手 指示物=遠 聞き手=存在の含意	観察対象・観察主体
直示的 there 構文 (5) There’s Harry with his red hat on.	there=場所指示・制限領域 -参照点=話し手の場所 -ターゲット=there の指示する場所 +実体・ジェスチャー可能	直示の中心=話し手 指示物=遠 聞き手=前提とされている聞き手の注意を引く	観察対象・観察主体

3.3. 存在的 there 構文

本節では存在的 there 構文(6)について、①参照点構造、②新情報実体の導入、③概念実体の導入（非存在構文=there 構文ではない通常文との比較から）、④ある的¹⁴表現（have 存在構文との比較から）、⑤話し手の観察態度（態度を表す副詞生起位置と形容詞の生起から）の5点から分析する。

- (6) 存在的 there 構文：There was a man shot last night. レイコフ(1993:580)
 (5) 直示的 there 構文：There’s Harry with his red hat on. ibid.

レイコフ(1993:580-580-582)は、存在的 there 構文(6)について、文頭の “there” は主語¹⁵であり、

¹⁴ 「ある的」とは、存在的 there 構文が表す事態の参加者は「使役的」動作主または「所有的」被影響者としてではなく、「存在」として表されているという意味である。これは後述する存在的 there 構文と have 存在構文との比較からの分析によるものである。

¹⁵ レイコフ(1993:580-582)による存在的 there 構文

- 1) 付加疑問文：主語に相当する代名詞が付加疑問の部分に現れる
 - Debbie saw Harry last night, didn’t she? / There was a man shot, wasn’t there?
- 2) 繰り上げ構文：主語が繰り上げ構文(A)(B)の主語になれる
 - John is sick. (A)John is believed to be sick. (B)John is likely to be sick.
 - There was believed to have been a man shot. / There is likely to be a man shot.
- 3) 否定可能性：There wasn’t anyone in the room.

その働きは場所を選び出すというより、実体の存在自体の強調にある、そこからジェスチャーは伴わず、“there”に強勢が置かれることもなく、母音が弱化することがあると、直示的 there 構文(5)との違いを述べている。

そして、参照点構造も存在的 there 構文(6)と直示的 there 構文(5)では異なっている。直示的 there 構文(5 *There's Harry with his red hat on.*)の場合は、話し手が参照点であり、ターゲットは“there”が指示している実体“Harry with his red hat on”であり、“there”は位置関係を示している。一方、存在的 there 構文(6 *There was a man shot last night.*)においては、ターゲットは“a man shot last night”であるが、それを位置付けるための参照点は話し手というより、場面的枠組みを提供している“there”が担っていると考えるべきだろう。尚、“there”の位置関係指示から場面的枠組みへの変化については4節で議論する。

このように両構文には顕著な違いはあるが、レイコフ(1993:696)¹⁶が主張しているように、直示的 there 構文と存在的 there 構文は各々別個の構文というより連続体を成していると思われる。両構文を繋ぐ例文を Langacker(1985)が2種類示している。まず第一が、Langacker(1985:138-139)の例文である。

(22) *There is snow all around me.* Langacker (1985:138/139)

(宇宙飛行士が惑星に着陸し宇宙船の周囲を探索しヒューストンにそれを冷静に報告)

I am in the middle of a large crater. It is approximately a kilometer in diameter. There is snow all around me, to a depth of about 10 centimeters. There is a thin crust of ice on the upper surface of the snow, except in the vicinity of the larger boulders.

Langacker (1985:139)

(23) *There is snow all around.* Langacker (1985:138/139)

(山にスキーに来た旅行客が山頂で友人に絵葉書を書く)

What a glorious day! The sun is shining, the sky is blue, and the scenery is spectacular. There's snow all around, as far I can see, and no smog at all. I feel great! Wish you were here. Langacker (1985:139)

まず、(22)と(23)の違いについて、Langacker(1985:139)は、話し手が自身の知覚に基づく記述を強調したいかどうかであると説明している。(22)では話し手は単純に物理的環境を記述しているが、(23)では話し手は実際に彼が見ているものを記述している。さらに、(22)はそのシーンが話し手の目で見えたものという解釈を妨げるものではないが、(23)は特にその解釈を示すと

4) 埋め込み可能性：従属節に自由に埋め込み可

● If there's anyone in the room with a red hat on, I'll be surprised. / I doubt that there's anyone in the kitchen.

5) Here との交替：不可*Here will be a man shot tomorrow.

¹⁶ レイコフ(1993:696)はこの存在的 there 構文もプロトタイプカテゴリーを成していると主張している。存在的 there 構文のプロトタイプは中心的存在構文(*There's a masked man outside.*)であり、その他に、奇妙、存在、不定詞、提示のカテゴリーがあると述べている(p.696)。さらに直示的 there 構文と存在的 there 構文は別個の構文ではなく、「中心的存在構文は中心的直示構文に基づく、ということを主張していく。私の主張では、2つの構文間には1つ基本的相違—存在の there の指示—があるだけであり、他の全ての主な相違はその1つの相違の帰結」と2つの構文の連続性を訴えている(p.671)。

述べている。つまり(22)は(23)と比較し、より客体的でより形式的表現ということになる。

(22)と(23)では雪の位置関係ではなく雪自体の存在が強調されていることから両方とも存在的 *there* 構文と考えられる。しかし、Langacker (1985:13)は(22)と(23)の状況を “perceptual experience” と説明しており、話し手が自分の目で見ている雪をその時点でその場にて描写していることから、参照点は話し手自身という解釈が妥当であろう。従って、(22)・(23)は存在的 *there* 構文ではあるが、参照点構造は直示的 *there* 構文と変わらないということになる。

しかし、描写が話し手の直接知覚ではない場合もある。Langacker (1985:140)は小説の冒頭部分としての(24)と(25)を挙げている。(24)と(25)も存在的 *there* 構文である。

(24) Dmitri was trudging through the woods. There was a clearing ahead of him. Langacker (1985:140)

(25) Dmitri was trudging through the woods. There was a clearing ahead. Langacker (1985:140)

まず、(24)と(25)の違いについて次のように説明されている。(24)は風景の客体的解釈を伝えている。一方、(25)は著者が Dmitri の視点でナレーションを行っており、Dmitri は目前に空間が広がっているのを知っている。(25)の Dmitri の行動描写は話し手の直接知覚によるものではなく、場面に登場している Dmitri の視点を通してである。この(25)の参照点を “there” が提供する場面的枠組みとも見なすことができるだろう。

これらのことから、存在的 *there* 構文が導入する実体が話し手の直接知覚経験によるものか否か等により参照点構造は異なり、この異なりは “there” の話し手の持つ二面性 — 観察対象・観察主体 — の内、いずれが前景化または焦点化されるかによるものと考えられる。そしてこれは存在的 *there* 構文内の連続体を示すものであると考える。

第2の導入実体の情報¹⁷という点でも、存在的 *there* 構文は直示的 *there* 構文とは大きく異なっている。直示的 *there* 構文(5) “There’s Harry with his red hat on.” で示されている実体は固有名詞 “Harry” が示しているようにその情報は新である必要はない。それに対して、存在的 *there* 構文

17 久野・高見(2007:292-293)は a 裸存在文・b *there* 存在文・c 場所句倒置文の情報構造の違いを次のように説明している：

- a. 裸存在文： A vase of glass with roses is on the dining table. 久野・高見(2007:292)
 通例のイントネーションの場合、バラの花が生けてあるガラス製の花瓶が、どこにあるか述べようとしている。主語にストレスが置かれる場合には、何が食卓の上にあるのかを述べようとしていると解釈可能。
- b. *there* 存在文： There is a vase of glass with roses on the dining table. 久野・高見(2007:292)
 *There is *the* vase of glass with roses on the dining table. 久野・高見(2007:293)
 食卓の上に何があるかを述べようとしていると解釈され、*there* 構文の意味上の主語は、聞き手にとって新情報を伝達する。
- c. 場所句倒置文： On the dining table is a vase of glass with roses. 久野・高見(2007:292)
 On the dining table is *the* vase of glass with roses. 久野・高見(2007:293)
 食卓の上に何があるかを述べようとしている点では *there* 存在文と同じであるが、主語が定名詞句でもまったく自然。存在物が、仮に聞き手がすでにその指示対象を了解し、動的できるものであってもかまわない。

が新情報の実体の導入を好むことはよく知られている特徴である^{18/19}。例えば、(6) “There was a man shot last night.”の導入実体は不定冠詞 “a”を伴っていることから新情報である²⁰。この点については改めて4節で議論したい。

さらに、その情報は単に「新しい」だけにとどまっていない。存在的 *there* 構文においてはその「新しさ」は “addressee-new information”^{21/22}であると言われている。つまり、たとえ、談話にはすでに導入されている実体であっても聞き手にとり何らかの意味で新しい実体ならば *there* 構文に導入することができる」と説明されている。

例えば、導入されている実体が定名詞であっても聞き手にとり何らかのことで新しい実体ならば導入が可能である。下記(26-28)はその例である。聞き手にリマインダーとして示す(26)、聞き手に他者が述べたことを繰り返す(27)、聞き手にとり既知情報であるモノのタイプの新しい具体例を示す(28)、等が挙げられている。

(26) A: I can't imagine what I'm going to make for dinner tonight.

B: [Well, there's the leftover meatloaf.] Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1398)
the leftover meatloaf=discourse-old だが flavour of reminders

(27) A: I know you want to go to the party, but you've got a lot of homework to do first. And wait – didn't you promise your sister that you would spend this evening helping her practise for the school play?

B: Well, yes – [there is that]. ibid.

AはBが忘れていた約束を思い出させている。Bはその約束を一方では新情報として他方では既に知っていた情報として扱っている。

¹⁸ *There* 構文の情報構造に関する日本語による文献として伊藤(2005:第4章)「英語 *There* 構文の機能とその情報構造」が詳しい。

¹⁹ 中島(編)(2001:86): 存在文のNPは不定(*indefinite*)名詞句に限られる。定(*definite*)名詞句が生じると存在文全体が非文になるので、定性制約(*definiteness restriction*)または定性効果(*definiteness effect*)という。

²⁰ Birner and Ward (1993): 1) 存在 *there* 構文と 2) 場所格倒置構文には①主語要素が述語後続名詞句として生起(後置要素) ②場所を示す、の二点の共通点があるが、下記の1), 2)に見るように談話における機能が異なる。

- 1) 存在 *there* 構文 *existential there-sentence*: In the garden there was a parrot.
談話においてではなく、聞き手にとり *new* な情報要素
- 2) 場所格倒置構文 *locative PP inversion*: In the garden was a parrot.
相対的に *unfamiliar* 情報を談話において相対的に *familiar* である文頭要素を介して先行コンテキストに結び付ける

²¹ Prince (1981/1992): Given/New information の二項対立は不適切であるとし、想定する熟知度(*familiarity*)のタイプによって分類している:

- Hearer-old, Discourse-old: 談話において既に喚起された情報で、聞き手にとり *familiar* と想定
- Hearer-old, Discourse-new: 談話において喚起されていないが聞き手にとり *familiar* と想定
- Hearer-new, Discourse-new: 談話において喚起されておらず聞き手にとり *familiar* ではないと想定
- Hearer-new, Discourse-old: 談話においてすでに喚起されている情報だが、聞き手にとり *familiar* ではないと想定(自然な談話においてはこのタイプはない)

²² 伊藤(2005:108): *There*-構文の意味的主語は、情報的には談話者が *accessible* と判断できる要素である。つまり、直前の談話において、すでに言及されているが、*There*-構文が現れる場面では、その認知的接近性が低下していると判断される要素である場合、あるいは修飾語句から、その指示対象を聞き手が認識できる場合が考えられる。さらに、意味的主語が指示する対象のイメージ・スキーマとしてのプロトタイプが聞き手の記憶の中にすでに存在している場合などが考えられる。

(28) Physics majors are required to take three courses in a foreign language, [and there is the same requirement placed on students in the other sciences].

物理学学生の必須と他の科学学生の必須

ibid.

従って、話し手は聞き手が単にその実体を知っているか否かにとどまらず、聞き手の現在の知識の状態にまで十分に注意を払っていることが見て取れる。この聞き手に注意を払っている姿勢という点は次の第3の特徴から見えてくる「聞き手への解説態度」とも重なっている。

第3の特徴は、導入実体のもう一つの特徴 — 抽象 vs. 具象 — の違いである。この特徴は存在的 there 構文と非存在構文 (there 構文ではない通常の文) との比較がよく示している。

存在的 there 構文の分類として、Huddleston & Pullum (eds.)(2002:6 Existential and presentational clauses)は、(29)“bare existential”と (30)“extended existential”の2種を挙げている。いずれも動詞が be 動詞であるという共通点を持つが、後者(30)のみが対応する非存在文を持つという違いがある。

(29) Bare existential: There's no milk (again).

Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1393)

- there + be 動詞 + displaced subject
- または括弧でしめす付加詞を伴うもの。付加詞は他の構文と同じように存在構文にとり重要なものではない。
- 対応する非存在文はない。

(30) Extended existential: There's one copy on the table.

ibid.

- there + be 動詞 + displaced subject + 下線部分
- 下線部分 (補部・付加詞) は存在構文に関連性が深い要素であり他の構文では自由に生起できない場合有。
- 対応する非存在文がある。(非存在文 One copy is on the table.から on the table は削除不可)

そこから、(30)“extended existential”とそれに対応する非存在構文との比較が、存在的 there 構文の特徴を示す方策となる。なぜならば、導入可能な実体の種類によって存在 there 構文と非存在構文の適切度が異なると言われているからである。Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1397)によると、(31ab-39ab)の例文が示すように、空間における具象的実体の場合は非存在文と存在 there 構文共に、適切であるが、空間そして時間における抽象的実体の場合は存在 there 構文が適切とのことである²³。但し、Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1397)はその理由については言及してい

²³ 村田(2005:第11章)は “There is no Ving.”を議論している。“There is no making up for losses in childhood. 幼少の頃失ったものを取り戻すことはできない。”(村田 2005:150) この構文は通例 “It is impossible to V”あるいは “We cannot V”とパラフレーズされる。文が過去時制である場合には「することがなかった」という事実の読みが優勢、時制が現在時制で併用される名詞も総称的の場合には超時間的(timeless)の解釈、とのことで

ない。

表3 Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1397)

	非存在文		存在的 there 構文
(31a)	空間における具象的な実体 A furniture van was in the drive.	(31b)	There was a furniture van in the drive.
(32a)	Two copies of Sue's thesis are on my desk.	(32b)	There are two copies of Sue's thesis on my desk.
(33a)	空間における抽象的実体 #Plenty of room is on the top shelf.	(33b)	There's plenty of room on the top shelf.
(34a)	#A hole is in my jacket.	(34b)	There's a hole in my jacket.
(35a)	#Sincerity was in her voice.	(35b)	There was sincerity in her voice.
(36a)	#Peace was in the region.	(36b)	There was peace in the region.
(37a)	#An accident was in the studio.	(37b)	There was an accident in the studio.
(38a)	時間における実体 One performance is at noon. 不定かつ抽象 先行談話から何の公演なのか明らかであり、参考談話と関係がある場合に主語として可	(38b)	There's one performance at noon.
(39a)	#A fireworks display is tonight. 不定かつ具体的事態 先行談話との関連性を示していない。 有りうるコンテクスト:花火大会が開催されることを知らせ、行こうと提案する →そのような場合にのみ適切	(39b)	There's a fireworks display tonight.

同様に、レイコフ(1993:671-672)も抽象物と there 構文との相性についてのボリンジャー(1977:96)の意見を次のように引用している。ただし、相性の理由については触れていない。

「行為が舞台上に生き生きと登場していなければならないほど [存在] の there が必要になる」(p.96)と言う。不在、概念性、一般的活動という抽象物は「舞台上に生き生きと」登場しておらず、したがって、存在の there を必要とする。論証のために、彼はブレヴィック(Breivik 1975)から次のような対比を引用する。具体的な対象が「舞台上」にない場合、存在の there が必要である。

- *In the house was no sign of life. (家の中には人の気配がなかった)
- In the house there was no sign of life.
- *On the table is probably a book. (テーブルの上に多分本が一冊ある)
- On the table there is probably a book.
- *At the party was dancing. (パーティではダンスが行われた)
- At the party there was dancing.
- 以上を次と比較すること。
- On the table lay a book. (テーブルの上に本が1冊あった)
- On the table there lay a book. (同上)

「抽象物はこの劇の中ではまずい役者になってしまう」というのがボリンジャーの結論である。
レイコフ(1993:671-672)

さらに、Frege (1991:188-189)は、there 構文を用いて概念(concept)と物体(object)の区別を説明

ある(p.168)。つまり抽象的概念を伝達可能という点で there 構文と類似しており興味深い。

している²⁴。まず、“There is Julius Caesar.”という文は意味をなさない文であるが、不定冠詞で導かれている人についての文 “There is a man whose name is Julius Caesar.”は概念を表しており、従って意味のある文と説明している。

Hence what is said here concerning a concept can never be said concerning an object; for a proper name can never be a predicative expression, though it can be part of one. I do not want to say it is false to say concerning an object what is said here concerning a concept; I want to say it is impossible, senseless, to do so. The sentence ‘There is Julius Caesar’ is neither true nor false but senseless; the sentence ‘There is a man whose name is Julius Caesar’ has a sense, but here again we have a concept, as the indefinite article shows. We get the same thing in the sentence ‘There is only one Vienna’. We must not let ourselves be deceived because language often uses the same word now as a proper name, now as a concept word; in our example, the numeral indicates that we have the latter; ‘Vienna’ is here a concept word, like ‘metropolis’.

Frege (1997:188-189)

英語母語話者²⁵に “There is Julius Caesar.” の適切性について尋ねた。実際に向こうに立っている Julius Caesar を指さして「ほら、あそこに Julius Caesar がいるよ」という文、つまり直示的 there 構文としてならば可能である、しかし、“There is Julius Caesar.”は「Julius Caesar という人がいる」という意味では非文とのことであった²⁶。Julius Caesar は固有名詞つまり具体的物体を指示している定表現であり、聞き手にとり旧情報を意味している、そのような Julius Caesar は存在的 there 構文とは噛み合わない。一方、不定冠詞を伴う “There is a man whose name is Julius Caesar.”は問題がない。Frege は、この違いを物体と概念の違いとして挙げているのである。

次に、“There is only one Vienna.”という文が取り上げられ、そこでは固有名詞 “Vienna”が数詞を伴う可算名詞となっており、そのことによりこの文は概念を表しているのが適切となると述べられている。

この点について早瀬(2018)の説明が参考になるだろう。早瀬(2018:37-38)は、固有名詞が複数になる例を「タイプと具体例」という枠組みで、次のように説明している。固有名詞とは、通常唯一的に存在する特定の個体を指し示すものとされているが、固有名詞であっても複数形になる場合がある。「チームに2人も松井がいるの？」という意味で “Oh, two Matsuis?” という表現が可能である。この場合、「松井」という名詞は個別の人物に結びついた具体化レベルから、「松井という名で呼ばれる人(一般)」という、2人が共有する共通性を表す表現として、概念レベルが1つ上がって言語表現となる。その結果、固有名詞「松井」はタイプ表現となり、普通名詞と同じような性質を帯びることになる。つまり、固有名詞が可算名詞に変わるのは、指示対象の概念レベルが上がって、タイプ表現になった場合ということになる。

²⁴ フレーゲによる概念と物体の違いについては、2018年度日本言語学会夏期講座の酒井智宏先生による「認知言語学」のご講義の中でのご教示によるものであり、ご指導に心より感謝いたします。本論文での解釈の誤りがある場合には筆者の責任によるものです。

²⁵ 青山学院女子短期大学 J. Phillips 教授のご教示に感謝いたします。

²⁶ 本論では分析対象としてはいない「リスト there 構文」(a list *there*-sentence)と呼ばれる there 構文がある(Ward & Birner 1995:735)。この構文は定性制限という点で最も議論されている。

A: Who was at the party last night? B: There was John, Mary, Fred, Susan, Hilda, Xavier, and Ethel.

従って、Frege の “one Vienna” も数詞が付加されたことにより、具体例からタイプへと変化し、そのことにより抽象レベルがあがり概念化され、存在的 there 構文で表現可能となっていることになる。この Frege の説明は、there 構文の持つ不定実体導入の特徴が抽象概念との親和性をもたらしている可能性を示唆しているのかもしれない。

さらに、there 構文と抽象的実体との親和関係について、Langacker(1991:354-355)は非常に興味深い意見を示している。以下の説明は筆者によるおおよその日本語訳であり、文中の「私」は Langacker のことである。

- (40) There are people dancing in the streets. Langacker (1991:354)
(41) There are said to be people dancing in the streets. ibid.

(40)に見るように“there-clause”には他の“setting-subject constructions”にはない特徴がある。それは“there”は多くの“logical subject”を動詞の後ろに取り、それが複数の場合には主語である“there”も複数扱いとなり動詞も複数となる。“There-clause”におけるこの動詞の一致を“logical subject”の数を反映したことによるもので例外であるとして単純に片づけることはできない。なぜならば、(41)の場合は、“there-clause”はイベント自体を叙述しているのではなく、それに対する“setting”の働きをしている。この文の場合、“people”は“say”の“logical subject”ではないにもかかわらず、動詞は複数である。

私が推測するに、“there”は実際、拡張の意味においては複数であると解釈されているのではないだろうか。複数(plurality)は複合的なカテゴリーであるが、典型的にはそれは同一タイプでかつ個々に指示できる具体例から成り立つ“mass”を指している。...中略... 認識すべき非常に重要なことは、“a replicate mass”（個体の集合としての塊）はかなり抽象的という点である。“Table”は物理的な物体を指すが、“tables”は“an abstract region”をプロファイルする。その“abstract region”とはある特定のタイプという点を共有する複数の構成実体から構築されているものである。従って、“there”が(40/41)に見るように複数というカテゴリーに入ることはその意味的拡張として不自然なものではない。この拡張の基本は“a replicate mass”と“an abstract setting”間の類似性によるものであり、その類似性とは複数の参加者が共通のプロセスタイプに関与するというものである。実際、“a replicate mass”は“a kind of set”であり、メタファー的に“sets”はそのメンバーの容器と捉えられる、それは“setting”がイベントや参加者の容器と捉えられるのと同じである。

以上が Langacker による存在的 there 構文が持つ複数そして抽象的事態との親和性についての説明である。このように存在的 there 構文は概念化・抽象化と非常に相性がよい。この点についても 4 節で議論したい。

概念化そして抽象化を話し手という点から考えると、この構文の話し手は事態を抽象化・概念化プロセスを経て捉え、それを聞き手に伝えていることになるのではないだろうか。直示的

there 構文の話し手は聞き手の注意を引くという働きを示していたが、存在的 there 構文ではさらに積極的に聞き手に「抽象化・概念化解説」をも行っていることになる。

もし抽象化・概念化というプロセスを存在的 there 構文が背後にもっているとするれば、この構文は個々の具体的事例を薄め、そうなることによりその事例に関与している参加者の姿が薄れる構文ということになる。この参加者の姿を際立たせない there 構文の特徴は、次の第4の存在的 there 構文と存在的 have 構文(Quirk et al 1985:1411 “The *have*-existential device”)との比較で一層見えてくる。

まず、(42-44)の例文が示すように、“I”が there 構文の中に生起することがある。これらの文においては、“there”が元々「観察対象兼観察主体」という話し手の姿を示しているところに、さらに、“I”が導入され、話し手が舞台の上にいるのが明示的である。つまり、話し手の観察対象としての姿がより強くなり、客体性は一段と高くなっている文である。

(42) There is something I would really like you to do for me.

Kenkyusha Online Dictionary 『和英大辞典』 下線は筆者による

(43) There is something about him I don't trust. ibid.

(44) No matter how much you order me, there is a point beyond which I, as a human being, will not go. ibid.

そのような存在的 there 構文(42-44)の論理的意味は、その“I”を主語とする存在的 have 構文(“The *have*-existential device”) (45-47)で表現することができる。

(45) I have something I would really like you to do for me.

(46) I have something about him I don't trust.

(47) No matter how much you order me, I have a point beyond which I, as a human being, will not go.

では両者はどのように異なるのだろうか。この違いについては、Quirk et al (1985:1411-1412) による“The *have*-existential device”の説明が示唆的である（以下には若干筆者による説明が補われている）。

(48) The porter has a taxi ready. [Cf: *There is a taxi ready; A taxi is ready – Type SVC*]

(49) He had several friends in China. [Cf: *There were several friends (of his) in China; Several friends (of his) were in Chia. – Type SVA*] Quirk et al (1985:1411)

(48)“The porter has a taxi ready.”は 基本型“A taxi is ready [SVC]”を含意する。しかし there 構文とは異なり、“The porter”という “theme”をエクストラな参加者として導入しており、これは基本

型からは通常は推論できない参与者である。“have-existentials”と基本的 SVC タイプとの対応を公式化すると下記(50-53)が仮定できるだろう。(50)の形式を具現化したものが(51)であり、(51)の NP²は主語を指示しこの存在命題において少なからぬ関与をするものであるが、これだけではどのような関与なのかは特定できない。なぜならば、(52)と(53)の2種の解釈が可能である。(52)においては NP²が “an agentive role”を務めているという強い含意があるが、つまりポーターがタクシーを準備させたという使役を表し、ポーターが動作主を意味する。一方、(53)において NP²は “a recipient”または “an affected role”である、つまり、お客が準備したタクシーを所有している=お客のためにタクシーが準備されている、という強い含意がある。

(50) NP¹ + be C(NP¹) ~ NP² + have + NP¹ + C(NP¹) Quirk et al (1985:1411)

(51) A taxi (is was) ready. ~ NP² (have has had) a taxi ready.

(52) *The porter has a taxi ready.*

(53) *You have a taxi ready.*

そこから、(45-47)の “The have-existential device”は主語に「使役的」動作主または「所有的」被影響者の強い含意を持つ表現であり、それらの動作主や被影響者を際立たせている構文ということになる。一方、there 構文 “There is a taxi ready.”にはそのような参与者の姿はなく、単にタクシーの存在のみを伝えている。そして、there 構文 (40) “There is something I would really like you to do for me.)と(45) “I have something I would really like you to do for me”を比較しても、(40)は「私がしてもらいたいことが存在する」という存在を示す文であり、一方、(45)は「私がしてもらいたいことを所有している」と所有を伝える文であり、捉え方が異なる。

つまり、there 構文では、参与者の姿は隠れているか、または存在として捉えられているにとどまっている。従って、存在的 there 構文は、実体を「場所」を介して「存在」—「ある的」として捉えているということが考えられる。この点は改めて4節で議論する。

この参与者を低め、事態をある的に捉えるというのは、Frege の “object”を固有名詞で“そして concept”を不定名詞で表現という説明と重なっている。参与者を固有名詞 “Julius Caesar”で表現するというはその参与者に際立ちが与えられている。一方、概念化されている “a man whose name is Julius Caesar”は参与者である “Julius Caesar”個人への際立ちが薄れた捉え方となっている。この参与者の際立ちの低下についても4節で議論する。

第5に、副詞と形容詞を用いて話し手の事態観察の角度を分析する。最初にグリーンボーム (1983:5 章)が態度離接詞(attitudinal disjuncts)と呼ぶ副詞の there 構文内の生起位置を見る。態度離接詞は「述べていることに対する話し手の態度や評価、または、それについての確信とか疑いの微妙な意味を表す」(グリーンボーム 1983:137) 働きを持つ。この副詞が there 構文のスコープ内外のいずれに生起することが適切かという容認度判断を “good” – “not natural” – “bad”の

3段階で行った²⁷。興味深いことに、(54-55)真偽に関する認識的態度を表す副詞は *there* 構文の スコープ内に生起するほうが自然であるが、(56-59)心情的評価的態度を表す副詞は *there* 構文の スコープ外がより自然とのことである。

probably – 事態の真偽に関する認識的態度を表す副詞

(54) ‘Good’ There will probably be more customers when the summer vacation starts.

Kenkyusha Online Dictionary 『英和大辞典』 下線は筆者による

(55) ‘Not natural’ Probably, there will be more customers when the summer vacation starts.

Fortunately, Interestingly – 事態に対しての心情的評価態度を表す副詞

(56) ‘Not natural’ There will fortunately be more customers when the summer vacation starts.

(57) ‘Good’ Fortunately, there will be more customers when the summer vacation starts.

(58) ‘Not natural’ There will interestingly be more customers when the summer vacation starts.

(59) ‘Good’ Interestingly, there will be more customers when the summer vacation starts.

“Kenkyusha Online Dictionary”を用いて心情的評価態度を表す副詞の位置を見たが、(60-62)が示すように、*there* 構文の スコープ外の例文のみで スコープ内の事例はなかった。(下線はいずれも筆者による)

(60) Fortunately, there were no serious casualties.

Kenkyusha Online Dictionary 『新編英和活用大辞典』 下線は筆者による

(61) Unfortunately, there is nothing we can do to improve matters.

Kenkyusha Online Dictionary *Oxford Advanced Learner's Dictionary 9th Edition* 下線は筆者による

(62) Interestingly, there are very few recorded cases of such attacks. *ibid.* 下線は筆者による

この現象を話し手の観察態度という点から考えると、*there* 構文の話し手は事態を観察するのみならず、その事態の真偽についての解釈は行うが、心情・評価についての解釈は行わないということになる。そして(60-62)のように評価副詞が *there* 構文の スコープ外に用いられている場合、話し手はもう一つ別の視点から事態を観察し評価しているということになる。

2つ目の分析角度は、生起可能な形容詞である。中島(編)(2001:89-90)は「存在文の主語 NP の後ろに述語が生じる場合、その述語は変化し得る状態(state)を表すものに限られる。恒常的な特性(property)を表す述語は生じることができない。」と述べている。生起可能な状態の形容詞として “alert, available, clothed, closed, drunk, hungry, missing, naked, open, present, sick, sober, stoned,

²⁷ 3.3 節および3.4 節における態度を表す副詞の生起容認度判断は青山学院女子短期大学 J. Phillips 教授によるものであり、ご協力に心より感謝を申し上げます。

tired, undressed, ...”,そして生起できない特性の形容詞として “beautiful, boring, crazy, intelligent, smart, tall, witty...”が挙げられている(p.90)。下記の(63-66)は一時的状態を表す「ステージレベル」の述語は適正だが、恒常的特性を表す「個体レベル」の述語の生起は非文となることを示している。

- (63) There is a man sick / *tall. 富澤(2002:86)下線は筆者による
 (64) There were three kids naked / *intelligent. ibid.下線は筆者による
 (65) There were quite a few nonmembers drunk / *talkative. ibid.下線は筆者による
 (66) There is a pitiful woman undressed / *careless. ibid.下線は筆者による

この現象の見方は様々あると思われるが²⁸、本論では話し手の観察態度というアングルを提案したい。それは、今または過去の一局面のみの事態を静止画のように切り取って観察している話し手の姿である。“there”が場面的枠組みであることからその枠組み内の局面的な事態観察²⁹を存在的 there 構文は表しており、従って非局面的な恒常的特性の表現は整合しないのではないだろうか³⁰。

本節では、①参照点構造、②新情報実体の導入、③概念実体の導入（非存在構文との比較から）、④ある表現（have 存在構文との比較から）、⑤話し手の観察態度（態度を表す副詞生起位置と形容詞の生起から）の5つの角度から存在的 there 構文を分析し、その結果、以下の特徴を提案する。

存在的 there 構文は多様な参照点構造を持っている。導入実体が話し手の直接知覚対象である場合には参照点は話し手であるが、そうではない場合の参照点はもはや話し手ではなく“there”で示された場面的枠組みへと変化している。そして “there”が示す枠組みも具体的場所から抽象的場所の幅を持っている。話し手は場面における事態の真偽評価そして抽象化は行いが、それ以外の感情的評価は行わない冷静な観察主体の態度を示し、かつ聞き手の現在の知識状態にも

²⁸ 中島（編）(2001:90)は「Milsark (1974)は、特性を表す述語が存在文に現れない理由を、『特性を表す述語は強名詞句のみを叙述する』という制約に原因を求めている。強名詞句とは……強数量詞を持つ名詞句のことである」という説明を紹介している。強数量詞は該当するもの全てを指し示す全称数量詞の働きをするもので、定冠詞もその一種である(中島（編）2001:86)。

²⁹ 井川(2002:101-102): Higginbotham, James and Gillan Ramchand (1997) The stage-level / individual-level distinction and the mapping hypothesis. *Oxford University Working Papers in Linguistics, Philosophy, and Phonetics* 2:pp.53-83. の意見として: there 構文は「何かについてとりあげ、述べる構文ではなく、存在承認、あるいは、その有無を言語化する構文であり、ことの出来、ものの出現など、ある状況を、ある時間軸空間軸上の局面として切り出した特殊構文である。

³⁰ There 構文の終結部の位置には名詞類が許されない(井川 2002:19・富澤 2002:86)という特徴を there 構文の捉え方とどのように関連づけるべきかは今後の課題である。不定でマークされている知らない人を「酔っ払っている」または「具合が悪そうだ」と観察することはできるかもしれないが、「酔っ払い」や「病人」と同定できるかという疑問がある。さらに、参与者の姿を低める表現を好む there 構文の中では、同定という参与者を際立たせるプロセスは整合性がとれないのではとも思われる。

1) Bob is a drunk. 富澤(2002:86)
 2) *There was an old man a drunk. (a drunk は一時的な状態を表すステージレベルの名詞) 富澤(2002:86)
 3) There is a man sick. (sick は一時的な状態を表すステージレベルの形容詞) 富澤(2002:86)

十分に留意しながら導入実体へ注意を引くという解説者の姿を見せている。そして、観察対象としての位置づけを完全には失っていないが、観察主体としての立場が勝っている。

表 4 特徴点

	定性	直示性	話し手
所格 “there” (4) Don't leave your shoes there.	there=場所指示・非制限領域 -参照点=話し手の場所 -ターゲット=there の指示する場所	直示の中心=話し手 指示物=遠 聞き手=存在の含意	観察対象・観察主体
直示的 there 構文 (5) There's Harry with his red hat on.	there=場所指示・制限領域 -参照点=話し手の場所 -ターゲット=there の指示する場所 +実体・ジェスチャー可能	直示の中心=話し手 指示物=遠 聞き手=前提とされている聞き手の注意を引く	観察対象・観察主体
存在的 there 構文 (6) There was a man shot last night.	There=枠組み指示・制限領域 -参照点=話し手の場所～there(具体的場所～抽象的场所) -ターゲット=実体の存在	直示の中心=話し手・参与者 指示物=新・概念 聞き手=聞き手の注意を引き解説 -枠組み時点の事態 -抽象的解釈 -真偽解釈 -聞き手にとり新情報の提示	(観察対象) 観察主体 冷静な話し手

3.4. 提示的 there 構文

本節では、提示的 there 構文(7/67)について、①動詞（存在的 there 構文との比較から）、②新情報実体導入、③話し手の観察態度（態度を表す副詞生起位置から）の3点から分析する。

(7) After they had travelled for many weeks, there came a moonlit night when the air was still and cool.

Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1402) 下線は筆者による

(67) Between the two candidates there exists a great deal of antipathy, the result of months of negative campaigning.

ibid.下線は筆者による

Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1402)は、(7/67)が示す様に “be 動詞”以外が生起する there 構文を提示的 there 構文³¹と分類している³²。この動詞の種類が提示的 there 構文の第一の特徴であ

³¹ レイコフ(1993)は、提示的存在的 there 構文を非中心的な存在構文の一つとして分類している(p.696)。

提示的存在的 there 構文：There walked into the room a tall blond man with one black shoe. p.696

- 自動詞句のみ：*Suddenly there hit Harry over the head a mugger brandishing a baseball bat. p.706（他動詞は不可） pp.705-706
- 動詞句は名詞句よりも長くあるいは情報量が多いものであってはならない：*Suddenly there burst into the room a man.（動詞句 suddenly burst into the room） p.706

³² 島山・本田・田中(2015:78-82)は「there 構文は後置主語 NP の位置によって2種類に分けられる」と述べ、以下の例文を挙げ、Yes-No 疑問文と定性効果に違いがあると述べている。

- 1) There appeared a man in the room. (there V NP PP) [IV] (=inside verbals) 島山・本田・田中(2015:78)
 Did there appear a man in the room? [IV] Yes-No 疑問文可能 島山・本田・田中(2015:79)
 There appeared (a/*the) man in the room. [IV] 定名詞句不可 島山・本田・田中(2015:81)

る。そして提示的 *there* 構文に生起可能な動詞として“*appear, arise, arrive, develop, emerge, enter, escape, follow, grow, lie, live, loom, occur, persist, sit, spring up, sprout, stand*”を挙げており、それらの多くは “*being in a position, coming into view*”の意味を表すと言われている。そこから実体の出現の意味を示す(68)は良いが、姿を消す(69)は容認度が落ちることになる³³。

(68) At the edge of the cave there appeared a terrifying grizzly bear.

Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1402)下線は筆者による

(69) #At the edge of the cave there disappeared a terrifying grizzly bear.

ibid.下線は筆者による

さらに、提示的 *there* 構文に生起する動詞については、存在や出現を表す非対格動詞(70)のみが現れ、(71)の非能格動詞は現れないという非対格制約説がある。

(70) 非対格動詞 : There stood an old grandfather clock in the hall opposite in the front door.

高見・久野(2002:35)下線・括弧は筆者による

- 意味上の主語 : *an old grandfather clock*
- D構造で動詞の目的語位置に生じ、S構造においてもその位置にとどまる。
- 文は主語を持たなければならない(拡大投射原理)により、空になっている主語位置に *there* がS構造で挿入される

(71) 非能格動詞 : *There danced a young girl in the ballroom.

ibid.下線・括弧は筆者による

- 意味上の主語 : *a young girl*
- 派生の全ての段階で主語位置を占めている。それゆえ目的語位置に移動することはない。そのため、非文。

この非対格性制約に対して、高見・久野(2002)は *there* 構文の適格性は単に動詞のみに依存しているのではなく、文中での場所を示す位置や意味的・談話的要因にも依存していると反論している³⁴。そして *There* 構文に課せられる機能的制約として「*There* 構文は、意味上の主語の左側の要素が、話し手(または話し手が自分の視点を置いている登場人物)にとって観察可能な存

2) There walked into the room a man. (there V PP NP) [OV](=outside verbals)

島山・本田・田中(2015:78)

*Did there walk into the room a man? [OV] Yes-No 疑問文不可

島山・本田・田中(2015:79)

There walked into the room (a/the) man. [OV]

島山・本田・田中(2015:81)

³³ Honda(1995:381)は “*Disappear-type verbs can be acceptable in the presentational there-construction, to varying degrees at that.*”と述べ、下記の例を示している。

1) In this vortex there *disappeared/went down* ship after ship.

Bolinger (1977:100) Honda (1995:381)

2) From an asylum near Providence, R.I., there recently *disappeared* an exceedingly singular person.

Lakoff (1987:570) Honda (1995:382)

³⁴ Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1402): Presentational clauses are generally intransitive, but transitives cannot be wholly excluded, as illustrated in the attested example *There seized him a fear that perhaps after all it was all true.*

在、非存在、出現あるいは非出現を表すと解釈される場合にのみ、適格となる。³⁵」（高見・久野 2002:65-66）と主張している。

本論は動詞の性質についてはこれ以上立ち入らないが、提示的 *there* 構文にいわゆる「なる的」性質を持つ動詞の生起が容易であることは“*there*”が元々場所を示すことばであることと関わりがあるのかもしれないと推測している。

そして提示的 *there* 構文の機能について高見・久野 (2002:50)は次のように説明している。

There が、場所を示す句と共起したり、場所を示す句を予測させるという事実は、その両者で1つの場面が設定される(scene-setting)ことを示しているということを考えられる。そして、多くの研究者が指摘しているように、*there* 構文は、ある物を談話上設定された場面に導入する「提示文」として記述することができる(Quirk et al 1985:1408)。従って *there* 構文の機能は、話し手と聞き手の間で了解された場面や明示的に示された場面に、人や物 (=意味上の主語の指示物) が「存在」したり「出現」したりすることを述べることであり、言える。高見・久野(2002:50)

従って、提示的 *there* 構文の場合も“*there*”は参照点として「話し手と聞き手の間で了解された場面や明示的にしめされた場面」を示し、その場面的枠組みの中で導入される人や物がターゲットであると考えられる。しかし、存在的 *there* 構文の静的ないわば一つの額縁のような場面的枠組みとは異なり、提示的 *there* 構文はターゲットの出現を表すことから、この枠組みは動的なあたかも場面転換の働きをも果たしていることになる。この変化については4節で議論したい。

聞き手に対して提示的 *there* 構文の話し手は特に注意を払っているようである。Quirk et al (1985:1408)は “The existential sentence has been described as ‘presentative’, in serving to bring something on to the discursal stage deserving our attention. This seems especially true of a rather less common, more literary type of existential clause in which *there* is followed by verb other than *be*:”と述べている。つまり、頻度が少なく、かつ文語的な響きを持つ *be* 動詞以外を動詞に持つ *there* 構文は聞き手の注意を引く働きが顕著とのことである。

この聞き手の注意を引くという点で興味深いのは、提示的 *there* 構文は存在的 *there* 構文に比べて、定名詞がより生起しやすいという特徴を持っている点である。これが導入実体の情報構造の特徴で第3点目の分析点である。

³⁵ 高見・久野(2002)

- 1) 動詞句外 (walk は存在も出現も表わさない非能格自動詞) :
There walked into the courtroom two people I had thought were dead. 高見・久野(2002:51)
場所句と結びつき出現を表している ・ 話し手は法廷にいる
- 2) (scream, laugh, howl=非能格自動詞)This book tells us what the world was like millions of years ago.
There screamed the panther - there laughed the hyena - there howled the baboon. 高見・久野(2002:53)
This book tells us what the world was like millions of years ago. がある物(事)が出現したり(起こったり)、存在したりしたという場面を導入する働きをしている。There 構文自体に場所を示す句がなくとも適格になる。
- 3) (dance=非能格自動詞) There was dancing with Mary quite a good-looking young man.
高見・久野(2002:61)
進行形はその場で起こっている行為や出来事を記述しているため、話し手はその行為や出来事の観察者であることを示す。それに加えて付加詞(with Mary)は話し手が Mary に注目していることを示唆し、話し手が観察者として機能していることを補強。

存在的 there 構文の定名詞は “addressee-new”でなくてはならないが、提示的 there 構文の定名詞は “discourse-new”ならば可能で、存在的 there 構文より条件が緩い。そこから(72c)は “was”の存在的 there 構文は容認度が低い(#)、 “stood”の提示的 there 構文では高くなる。

(72) President Clinton appeared at the podium accompanied by three senators and Margaret Thatcher.

Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1402) 下線は筆者による

a. Behind him there stood / was a bodyguard.

不定名詞 a bodyguard のことは前文で言及されていない：提示・存在構文の両方に可

b. #Behind him there stood / were the senators.

定名詞 the senators=前文で上院議員のことが言及されているので discourse-old: 提示・存在構文の両方において低容認度

c. Behind him there stood / #was the Vice President.

定名詞 The vice president=discourse-new であるが副大統領の存在は米国国民にとり addressee old : 提示構文は可、存在構文不可

これらのことから、提示的 there 構文においては、話し手は展開する談話に、場面転換により注意を向けていると考えられる。そして、聞き手の存在の重要性そしてその聞き手へ対処する話し手の細やかさが、所格 “there”から提示的 there 構文へと徐々に際立ってきていることが見て取れる。

第4点目が態度を表す副詞の生起位置が示す話し手の観察態度である。前節と同様に、提示的 there 構文(68)にも態度を表す副詞を加えて、話し手がどのような解釈をしているのか確かめる。容認度判断は前節と同じく “good” – “not natural” – “bad”の三段階である。

(68) At the edge of the cave there appeared a terrifying grizzly bear.

Huddleston & Pullum (eds.)(2002:1402)

probably – 出現の真偽に関する認識的態度を表す副詞

(73) ‘Not natural’ At the edge of the cave there probably appeared a terrifying grizzly bear.

(74) ‘Good’ Probably, at the edge of the cave there appeared a terrifying grizzly bear.

suddenly – 出現の様態を表す副詞

(75) ‘Good’ At the edge of the cave there suddenly appeared a terrifying grizzly bear.

(76) ‘Good’ Suddenly, at the edge of the cave there appeared a terrifying grizzly bear.

fortunately, interestingly - 出現に対する心情的評価を表す副詞

- (77) ‘Not natural’ At the edge of the cave there fortunately appeared a terrifying grizzly bear.
 (78) ‘Good’ Fortunately, at the edge of the cave there appeared a terrifying grizzly bear.
 (79) ‘Not natural’ At the edge of the cave there interestingly appeared a terrifying grizzly bear.
 (80) ‘Good’ Interestingly, at the edge of the cave there appeared a terrifying grizzly bear.

興味深いことに、事態の真偽評価を表す “probably”は提示的 there 構文ではスコープ外のほうがより自然であり、スコープ内の生起が可能な存在的 there 構文とは異なる。しかし、出現の様態を表す “suddenly”はスコープ内外いずれの生起も自然である。一方、事態の心情的判断を示す “fortunately”, “interestingly”はスコープ外の方が提示的 there 構文においても自然という結果であり、これは存在的 there 構文と同じである。これらのことから、提示的 there 構文の話し手は、出現について真偽判断は行わずむしろ出現を前提として受け止め、その様態についての解釈は行いが、心情的解釈は行わないという態度であることがうかがえる。

本節では提示的 there 構文を、①動詞、②導入実体新情報、③副詞生起位置の3点から考察した。出現を前提として捉えその様態については述べるが、それ以外の解釈はせず冷静に事態を観察し、場面展開を聞き手に示すことに注意を払っている話し手の姿が観察された。

表5 特徴点

	定性	直示性	話し手
所格 “there” (4)Don’t leave your shoes there.	there=場所指示・非制限領域 -参照点=話し手の場所 -ターゲット=there の指示する場所	直示の中心=話し手 指示物=遠 聞き手=存在の含意	観察対象・観察主体
直示的 there 構文 (5)There’s Harry with his red hat on.	there=場所指示・制限領域 -参照点=話し手の場所 -ターゲット=there の指示する場所 +実体・ジェスチャー可能	直示の中心=話し手 指示物=遠 聞き手=前提とされている聞き手の注意を引く	観察対象・観察主体
存在的 there 構文 (6)There was a man shot last night.	There=枠組み指示・制限領域 -参照点=話し手の場所～there(具体的場所～抽象的場所) -ターゲット=実体の存在	直示の中心=話し手・参与者 指示物=新・概念 聞き手=聞き手の注意を引き解説 -枠組み時点の事態 -抽象的解釈 -真偽解釈 -聞き手にとり新情報の提示	(観察対象) 観察主体 冷静な話し手
提示的 there 構文 (7)After they had travelled for many weeks, there came a moonlit night when the air was still and cool.	There=枠組み指示・制限領域 -参照点=there 場面展開 -ターゲット=実体の出現等	直示の中心=話し手・参与者 指示物=新 聞き手=聞き手の注意を引き解説 -枠組みの展開 -出現様態解釈 -談話にとり新情報の提示	(観察対象)・観察主体 特に聞き手に注意を払う

4. There 構文の捉え方

前節では、所格“there”の①・②・③の特徴から直示的・存在的・提示的 there 構文を分析した。

- ① 定性：場所指示・非制限領域
- ② 直示性：直示の中心としての話し手・指示物への遠さ・聞き手の存在の含意
- ③ 話し手：観察対象・観察主体の二面性

3節表5は①・②・③いずれの特徴も少しずつ変化しており、所格“there”そして各種の there 構文は家族的類似性を持つ連続体を成しているということを示している。Langacker (2004)は、言語現象の多くが程度の問題 (a matter of degree)であり、語彙と文法は連続体を構成し、従ってプロトタイプモデルの妥当性を主張しているが、there 構文もその一例であると言えよう。

上述の①～③の中でも「場所指示」+「指示物への遠さ」は他のダイクシス表現にはない“there”の特徴ではないかと思われる。本節では、3節での分析結果を踏まえ、この2つの角度から there 構文の事態の捉え方を考える。

まず「場所指示」を考察する。この点において顕著な第1点目は、“there”の指示の変化である。“there”は、所格“there”においては場所を、直示的 there 構文においては場所に存在する実体を指しており、“there”は位置関係 (locative relationship) を示す働きをしている。しかし、存在的・提示的 there 構文においては、“there”は位置関係を特定するというより、実体が存在し出現する場面の提示へと変化している。これは、Langacker (1991:352/2000:43)の主張している“abstract setting”、一種の抽象的場面設定の機能への変化である。

この構図を参照点構造から言い換えると、所格“there”そして直示的 there 構文の“there”では話し手の存在場所が参照点であり“there”が指示する場所/指示物がターゲットであるが、存在的・提示的 there 構文においては — 話し手の直接知覚によるものか否か等の導入実体の状況によっては — “there”は場面的枠組みを示す参照点へと変化し、ターゲットは其中へ導入される実体である。特に、存在的 there 構文においてはその場面は具体的場所から抽象的場所までの幅を持っている。

参照点の働きをするこのような場面的枠組みを“search domain”³⁶ (探索領域) と言い換えることができる。 “search domain”とは、Langacker (2006:31)が“locative prepositions” (所格前置詞句) の特徴の一つとして述べているものである。“locative prepositions”は“trajector” (最も際立ちを持つモノ) と“landmark” (二番目に際立ちをもつモノ) との位置関係(locative relationship)をプロファイルするのみならず、“search domain”としても機能する。“A search domain is the spatial region to which a locative expression confines its trajector, i.e. the set of trajector positions that will satisfy its specifications.”(Langacker 2006:31)/ (Langacker 2009:99)/ (Langacker 2017:281) と定義されている。つまり、探索領域とは空間領域で、所格表現はその空間制限内にトラジェクターが存在することを限定しているのである。

³⁶ Langacker (2000)/(2006)の所格前置詞句と探索領域に関する議論は、2018年度東京言語研究所の西村義樹先生による「認知言語学」のご講義においてご教示いただいたものであり、ご指導に心より感謝申し上げます。本論文での解釈の誤りがある場合には筆者の責任によるものです。

Langacker (2006:31)は、探索領域・トラジェクター・ランドマークの3者関係は“SEARCHING and FINDING”という概念的原型を反映したものであると述べている。何かを探す場合に、際立ちのあるものを参照物とし、そこの近隣を探し目的物を見つけるというという普遍的な日常経験がこの3者関係に現われていると説明しているのである³⁷。

議論を進める前に、前置詞句の議論と“there”の関係を説明する。“there”は副詞であることから、例えば、“I put the book on the desk / in the box.”の“on the desk”と“in the box”は各々“there”に置き換えることができる(I put the book there.)。つまり、“there”の位置関係を示す働きは前置詞句のそれを含んでおり、そこから本論ではLangackerの前置詞句についての説明を“there”に援用するのは妥当であると考えられる。

それではなぜ位置関係の特定を機能とする前置詞句そして“there”が“search domain”(探索領域・場面的枠組み)という「場所」へと変化することができるのだろうか。その答えもLangacker (2000:54-55)が示している。Langacker (2000:54-55)による前置詞句の説明は以下のとおりである。

- (81) ?*Near the fire is warmer.* Langacker (2000:54)
 (82) ?*Under the bed is all dusty.* Langacker (2000:54)

(81)と(82)は判断が微妙な例文ではあるが、このような表現を受け入れる話者は多い。これらの前置詞句は位置関係を表しているのではなく、空間領域を名指している。“Near the fire”, “Under the bed”は空間における領域を明示していることから、各々はモノのタイプ(a type of thing)をプロファイルし、名詞として機能している。

The form reflects their source: they instantiate a pattern of semantic extension (or zero derivation) whereby a prepositional phrase, which profiles a locative relationship, gives rise to a nominal expression that evokes the same conceptual content but profiles instead a spatial region. The effect of this zero nominalization is to make the search domain – only latent in the expression’s basic relational meaning – a focus of explicit concern and maximal prominence. Langacker (2000:54-55)

つまり、例えば、“The ball is under the bed.”における“under the bed”はボールの位置関係を指示している。しかし同じ“under the bed”が(82)では場所自体を表す名詞表現へと変化し(ゼロ名詞化)、その名詞は探索領域を指示している、ということになる。ゼロ接辞による品詞転換が非常に容易な英語においては、形が前置詞句のまま名詞句の働きをすることは自然な意味拡張であり、“under the bed”もその一拡張例ということになる。そのゼロ名詞化の効果が探索領域であり、潜在的な意味関係の表現であったものが明示的にかつ最大に際立ちを持つものへの変化ということになる。

とするならば、“there”も所格“The ball is there.”においては位置関係を示し、その位置自体が

³⁷ Langacker (2006:33)は前置詞のスキーマとして以下を示している。“the subject of conception (S) evokes the landmark as a reference point (R) in order to mentally situate the trajector, the target (T) of search. The search domain is thus the reference point’s dominion(D), i.e. the region accessible through it.”

ターゲットとして機能している。一方、**there** 構文においては「探索領域」である「場面的枠組み」として働き、その機能は上述の定義の通り、その領域内にトラジェクターである導入実体の存在や出現を制限するものということになる。

また、トラジェクターの範囲を限定する探索領域という所格が持つ性質が「容器のメタファー」に支えられ「領域を明確にすること、領域の周囲に境界線を引くこと」(レイコフ 1986:45)へと焦点が移り、実体導入の枠組みへと変化したのではないかとも考えられる。

第2点目は、参照点である探索領域が「場所」であることにより、そこで示される実体や展開される事態が場所に「ある」として捉えられる—「ある的」—という点である。(42-44)の日本語訳の「ある」・「ところ」がいみじくもその特徴を表していると言えるだろう。

(42) There is something I would really like you to do for me. あなたにぜひ実行してもらいたいことがある。
Kenkyusha Online Dictionary 『和英大辞典』 下線は筆者による

(43) There is something about him I don't trust. あの男にはどこか信用できないところがある。 ibid.

(44) No matter how much you order me, there is a point beyond which I, as a human being, will not go. いくらあなたに命令されても人間として譲れない一線がある。 ibid.

この「ある的」という分析結果は下記の Langacker (1991: 8.1.3.4 p.351) の **there** 構文は“imperfective process”を表すという意見と一致するのではないだろうか。

There designates an abstract setting construed as hosting some relationship. This is put in correspondence with the relationship profiled by *be*, namely the continuation through time of a stable situation (characterized only schematically). The composite structure *there be* is an imperfective process equivalent to *be* apart from the (by now familiar) shift in focus that results from trajector status being conferred on the setting.

Langacker (1991: 352)

そして第3点目はその「場所」が場面の展開として働く点である。“**there**”の働きは存在的 **there** 構文においては静的な額縁のような場面的枠組みとして機能している。しかし、実体の出現・存在を導入する提示的 **there** 構文においては、“**there**”は動的な場面転換の働きにまで拡張している。

この拡張には日本語の場所表現「ところ」(靱山・深田 2003:77) との興味深い類似点が見えてくる。「ところ」は場所のみならず時間表現にまで拡張しているが(83-85)、さらに (86)のように話しの枠組みを変える談話機能としても使われる。この機能と類似して、提示的 **there** 構文においても本来は静的な性質を持つ場面が、出現動詞に呼応する形で、動的な場面転換へと機能を変化していったものではないだろうか。

(83) こんなところで君に会うとは思わなかった。空間の意味 修飾語有り

(84) ところによってはにわか雨が降るでしょう。空間の意味 修飾語無し 靱山・深田(2003:77)

- (85) このところいい天気が続いている。 時間の意味 修飾語有り 靱山・深田(2003:77)
 (86) ところで、夏休みはどうするの？

次に「指示物への遠さ」— 所格“there”の示す場所への「遠さ」という距離感から可能な考察点を以下に示したい。現時点ではこれらの「遠さ」に関する議論は推測にとどまるものであるが、認知言語学では身体性と言語表現の関係に重きを置くことから、今後のさらなる考察及び検証へと結び付けたいと考えている。

第1に存在的 there 構文は新情報と相性が良い。所格 “there”の指示物へ「遠さ」という性質がこの新情報との相性を支えているのではないだろうか。所格 “there”が指示する物体は話し手から「遠く」離れており「近く」ではない。近いものはよく見えることからよく知っているものであり、遠いものはよく見えないことからわからないものと解釈する。この解釈は、英語 “see”が「見る」から「わかる」へと意味拡張していることから自然な拡張ではないかと思う。そしてそれが次のようにさらに拡張しているのではないだろうか。近いものは特定が可能なモノであり、遠いものは特定ができないモノ、さらに、近いモノはよく知っている旧情報を持つ定で、遠いモノはよくわからない新情報を持つ不定と理解する。この認知メカニズムが存在的 there 構文における新情報を持つ実体の導入を支えているのではと推測する。

さらに、第2として、ズームアウトして遠くから事態を観察すると参与者個々のそれぞれの特徴は消え、全体としての特徴が浮かびあがる。そのことによって抽象度が高い観察になり、その結果、概念として事態を捉えることができる。そのようなプロセスを存在的 there 構文の話し手は行っているのかもしれない。そう考えると存在的 there 構文と抽象的事態の導入の相性が理解できるかもしれない。

第3に事態への「遠さ」が話し手の観察対象としてよりも観察主体としての姿を強め、そして第4としてその観察に冷静さをもたらすと推測する。

第5は、話し手の聞き手への解説者としての態度である。話し手の観察主体としての姿勢が解説者へと移行すると見るのはさほど無理はないと考える。一方、聞き手も事態が「遠い」ことから理解のために話し手に解説を求めるのではないだろうか。所格 “there”から直示的、存在的そして提示的 there 構文へと次第に聞き手の存在が重要になり、それに伴い、話し手の聞き手への留意態度も細やかになっている。話し手は観察結果を示すのみならず聞き手へ積極的に抽象化そして概念化という解説を行っている。

表 6 there 構文に見る“there”の働き

“there”					
場所指示			指示物への遠さ		
位置関係 ↓ 探索領域	事態の 「ある的」捉え方	場面 ↓ 場面転換	不定実体・ 抽象的実体 の導入	話し手 ↓ 観察主体	聞き手 ↓ 前提
				話し手の聞き手への解説行為	

上記表 6 から本節冒頭に示した “there” の①・②・③の性質が there 構文に顕著に見られることがわかる。そこから there 構文の捉え方として下記④を提示したい。

④There 構文の捉え方とは、there 構文の最も際立ちのある文頭におかれている “there”を介しての事態の解釈である。

「“there”を介して」という表現は Recanati (2016:6 章)³⁸の “Indexical Thought”から着想を得たものである。“Indexical Thought”は様々な解釈があるようだが本論には次の箇所が示唆的であり、“Indexical Thought”を本論では捉え方の指標と解釈したい。

6.2 Thought Vehicles

Perry locates indexicality not in the content of believe but in the *belief state* through which the content is apprehended; or, more accurately, in the relation between the content and the belief state.It is also possible for the same content to be presented under distinct modes of presentation,

Recanati (2016:102)

事態の捉え方は、西村(2018:15-16)が述べるように、認知文法において重要な視点である。

言語形式の担う意味の成立にはその形式と慣習的に結びついた、事物に対する特定の捉え方(事態のどの面や段階に焦点を合わせるのか、誰または何を中心とした事態として解釈するか、どのような視点から事態を眺めるか、などの要因)が決定的に関与していると考えられる認知文法.....

西村(2018:15-16)

There 構文の場合、その捉え方のインデックスとなっているのが最も際立ちのある文頭におかれている “there”であると考えられる。

5. 結論

本論の目的は there 構文における “there”の拡張プロセスを示し、この構文の事態の捉え方を示すことにある。

2 節では分析に先立ち、there 構文の “there”を巡る議論を紹介した。“Dummy there”と呼ばれるような形式主語と見なす立場がある一方、本論が枠組みとする認知文法においては、意味を持ち、その機能は「一種の抽象的場面設定」であると主張していることを説明した。ただし、より十全な研究が待たれている状況であることも述べた。

3 節では語彙的性質を持つ所格 “there”の特徴①・②・③を導きだした。

³⁸ Recanati (2017)及び “Indexical Thought”は 2018 年度日本言語学会夏期講座の酒井智宏先生による「認知言語学」のご講義の中でのご教示によるものであり、ご指導に心より感謝いたします。本論の理解に不足がある場合は筆者の責任によるものです。

- ① 定性：場所指示・非制限領域
- ② 直示性：直示の中心としての話し手・指示物への遠さ・聞き手の存在の含意
- ③ 話し手：観察対象・観察主体の二面性

そして、there 構文 —直示的 there 構文・存在的 there 構文・提示的 there 構文— の特徴を①・②・③の観点から考察した。分析の結果、所格“there”そして there 構文は家族的類似性を持つ連続体を示していることを述べた（3 節表 5）。

4 節では、3 節での分析結果を基に、“there”の拡張プロセスと捉え方をさらに追求した（4 節表 6）。その結果、there 構文の捉え方として④を提案し、その具体的説明として a～c を示す：

- ④ There 構文の捉え方とは、there 構文の最も際立ちのある文頭におかれている “there” を介しての事態の解釈である。
 - a. 所格“there”・直示的 there 構文では “there” は位置関係を示している。所格 “there” においては、話し手の存在場所が参照点であり “there” が指示する場所がターゲットであるが、直示的 there 構文では参照点は同じであるが、ターゲットは場所に存在する実体へと変わっている。存在的・提示的 there 構文においては、“there” は次第に探索領域・参照点へと変化し、ターゲットはそこへ導入された実体である。存在的 there 構文における参照点は静的な具象的・抽象的場面の枠組みとして機能し、提示的 there 構文においてはその枠組みは動的な場面展開の働きを持つ。
 - b. 所格“there”の指示物への遠さという性質が there 構文においては新情報・抽象化された実体の導入を支えている。
 - c. 話し手は there 構文においては観察対象としての姿は薄くなり、冷静な観察主体として枠組み内の局面的事態を「ある的」に表現している。さらに聞き手の知識の状態に留意しつつ積極的に事態を解説する能動的な働きを見せている。

上述の分析結果はまだ多くの論証を必要とするのはもちろんであるが、Langacker (2011:213) の there 構文に関する問題提起に対する一つの試案として、そして there 構文は一種の抽象的場面設定機能を持っているとする Langacker (1991:352/2000:43/2011:213) の主張の論証の一つとして、本論を提示したい。加えて、本論の提案が語彙と文法は連続を成している、そして全ては形式と意味のペアであるという認知文法の基本的考え方の妥当性を示すものであることを希望している。

1 節冒頭で述べたように、there 構文と impersonal *it* 文との関係については次の課題として研究を進める所存である。

参考文献

- Birner, Betty & Gregory Ward (1993) “There-Sentences and Inversion as Distinct Constructions: A Functional Account” *Proceedings of the Nineteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: pp.27-39.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. New York: Longman.
- Fauconnier, Gilles (1985) *Mental Spaces*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Frege, Gottlob (1997) “On Concept and Object.” In Michael Beaney (ed.) *The Frege Reader*. Malden / Oxford / Carlton: Blackwell. pp.181-193. (First published in the *Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Philosophie*, 16 (1892): 192-205.)
- グリーンボーム, S (1983) 郡司利男・鈴木英一 (監訳) 『英語副詞の用法』東京: 研究社出版.
- 畠山雄二・本田謙介・田中江扶 (2015) 『日英語比較構文研究』東京: 開拓社.
- 早瀬尚子 (2018) 「名詞の認知文法論」西村義樹 (編) 『認知文法論 I』東京: 大修館書店. pp.25-87.
- Honda, Akira (1995) “Figure-Ground Reversal in the Presentational *There*-Construction.” 馬場彰 (他) (編) 『長谷川欣佑教授還暦記念論文集』東京: 研究社. pp.381-390.
- Huddleston, Rodney & Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 井川壽子 (2002) 『イベント意味論と日英語の構文』東京: くろしお出版.
- 伊藤徳文 (2005) 「第4章 英語 *There* 構文の機能とその情報構造」『談話情報と英語構文解釈』東京: 英宝社.
- 研究社 Online Dictionary 『英和大辞典』・『和英大辞典』・『新編英和活用大辞典』・*Oxford Advanced Learner's Dictionary 9th Edition*
- Kuno, Susumu (1972) “The Position of Locatives in Existential Sentences.” *Linguistic Inquiry* 2. pp.333-378.
- Kuno, Susumu & Etsuko Kaburaki (1977) “Empathy and Syntax.” *Linguistic Inquiry* Vol. 8, No. 4. pp. 627-672.
- 久野暉・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味』東京: 開拓社.
- Langacker, Ronald W. (1985) “Observations and Speculations on Subjectivity.” In (ed.) John Haiman *Iconicity in Syntax: Proceedings of a Symposium on Iconicity in Syntax in Stanford*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. pp.109-150.
- Langacker, Ronald W. (1990a) “Subjectification.” *Cognitive Linguistics* 1-1. pp.5-38.
- Langacker, Ronald W. (1990b) *Concept, Image, and Symbol*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar* Volume II. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1996) “Conceptual Grouping and Pronominal Anaphora.” In Barbara Fox (ed.)

- Studies in Anaphora*. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins Publishing Company. pp.333-378.
- Langacker, Ronald W. (2000) *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2004) “Discreteness.” In Aarts, Bas, David Denison, Evelien Keizer & Gergana Popova (eds.) *Fuzzy Grammar*. Oxford: Oxford University Press. pp.131-137.
- Langacker, Ronald W. (2005) “Construction Grammars: Cognitive, Radical, and less so.” In Francisco José Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel (eds.) *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. pp.101-159.
- Langacker, Ronald W. (2006) “Subjectification, grammaticization, and conceptual archetypes.” In Angeliki Athanasiadou, Costas Canakis & Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: various paths to subjectivity*. Berlin/New York. Mouton de Gruyter. pp.17-40.
- Langacker, R. W. (2007) “Constructing the meanings of personal pronouns.” In Radden Günter, Klaus-Michael Köpcke, Thomas Berg and Peter Siemund (eds.) *Aspects of Meaning Construction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.171-187.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar A Basic Introduction*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2011) “On the subject of impersonals.” In Brdar, Mario, Stefan Th. Gries & Milena Žic Fuchs (eds.) *Cognitive Linguistics Convergence and Expansion*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.179-217.
- Langacker, Ronald W. (2017) *Ten Lectures on the Basics of Cognitive Grammar*. Leiden/Boston: Brill.
- 榎山洋介・深田智 (2003) 「第 3 章 意味の拡張」松本曜 (編) 『認知意味論』東京：大修館書店。
- 村田勇三郎 (2005) 『現代英語の語彙的・構文的事象』東京：開拓社。
- 中島平三 (編) (2001) 『英語構文辞典』東京：大修館書店。
- 西村義樹 (2018) 「第 1 章 認知言語学の文法研究」西村義樹 (編) (2018) 『認知文法論 I』東京：大修館書店。pp.3-23.
- Prince, Ellen F. 1981. “Toward a Taxonomy of Given-New Information.” In (ed.) Peter Cole. *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press. pp.223-255.
- Prince, Ellen F. 1992. “The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information-status.” In (eds.) William C. Mann & Sandra A. Thompson. *Discourse Description*. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins. pp.295-325.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- レイコフ、ジョージ(George Lakoff)(1986) 渡部他 (訳) 『レトリックと人生』(*Metaphors We Live By*) 東京：大修館書店。

レイコフ、ジョージ(George Lakoff)(1993) 池上他(訳)『認知意味論』(*Women, Fire, and Dangerous Things* (1987)) 東京：研究社.

Recanati, François (2016) *Mental Files in Flux*. Oxford: Oxford University Press.

高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』 東京：研究社.

Talmy, Leonard (2017) *The Targeting System of Language*. Cambridge/London: The MIT Press.

富澤直人 (2002) 「第9章 There 構文」中村捷・金子義明(編)『英語の主要構文』 東京：研究社. pp.81-90.

Ward, Gregory & Betty Birner (1995) “Definiteness and the English Existential.” *Language* Vol. 71 No. 4. pp.722-742.

The Construal of the *There*-constructions

Kumiko Yumoto

yumoto@ccs.aoyama.ac.jp

Keywords: *there*-constructions definiteness deixis objective/subjective speaker
reference-point-relationship

Abstract

The purpose of the present paper is to describe the construal of the deictic, existential and presentational *there*-constructions. For this purpose, we firstly define the distinctive features of the locative *there*, which is believed to have the clear referential properties as follows: ① definiteness (the delimitation of place), ② deixis (speaker as the deictic center, distality, implication of an addressee/s), ③ an objective/subjective speaker. Secondly, we examine how those features are related to the specific functions of the *there*-constructions. The results of our research confirm that the locative *there* and the series of the *there*-constructions form a gradation with a family resemblance. Then, we suggest that “there” which is placed at the beginning of the sentence, the most salient position, is an index of the distinct mode of the construal of the *there*-constructions. These findings are in accordance with basic principles of Cognitive Grammar, wherein *there* is claimed to be meaningful and the lexicon and grammar form a gradation consisting solely in assemblies of symbolic structures.

(ゆもと・くみこ 青山学院大学)